

事故事例に学ぶ 153  
車両右折時の横断歩道横断中の事故

これは、(一財)全日本交通安全協会発行「人と車」2021年7月号に掲載された記事の概要を紹介するものである。筆者は(公財)交通事故総合分析センター 西山 直毅氏である。図は記事をもとにSDAで作成した。

■ 事故の概要

午後6時過ぎに普通乗用車を運転していたAさん(30代、男性)は右折車線が設けられた往復5車線の信号機が設置された見通しの良い十字路交差点に右折車線から右折しようと進入した。このとき、Aさんは対向車Cが交差点を左折したことから、交差点付近に歩行者はいないもの

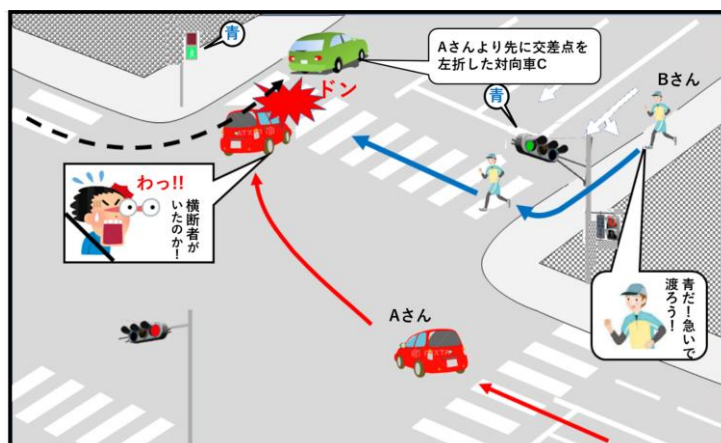


図1 事故の概要

のと考え、右折先の道路の方ばかりを見ながら右折を始めたところ、交差点出口の横断歩道を右から左に横断中のBさんと時速30キロ前後で衝突してしまった。このときAさんは衝突するまでBさんが横断していることに気付いていなかったため、ブレーキ操作は行っていなかった。一方、Bさん(50代、男性)はジョギング中で横断歩行者用の信号がちょうど青だったので、横断歩道の手前で止まらずに横断を始めていた。この事故でBさんは脳出血や頭部の骨折などの重傷を負ってしまった。

■ データから見る事故実態

図2に平成23年から令和2年までの横断歩行者の死亡重傷者数の推移を横断歩道横断中とそれ以外の横断場所の横断中に分けて示す。

まず、横断中全体として死亡重症者数は減少傾向にあるが、横断歩道横断中が占める割合は年々増加し、令和2年には50%に達した。

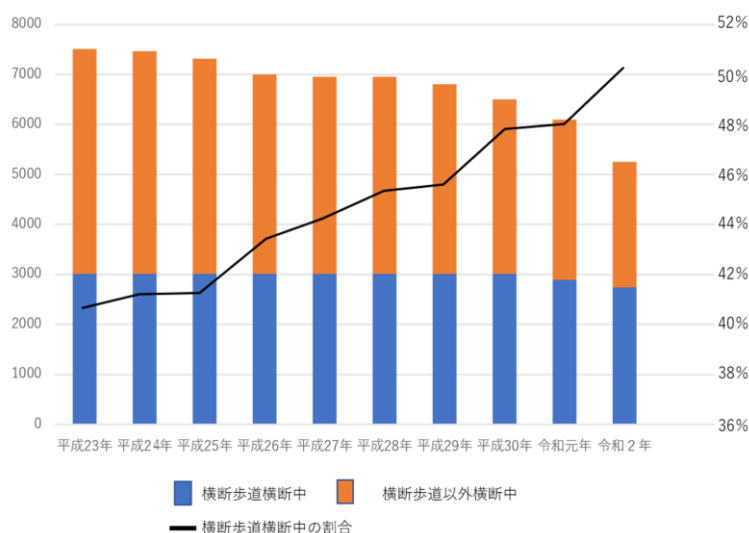


図2 横断歩行者の横断場所別死亡重傷者数の推移

図3に横断歩道横断中の死亡重傷者数を車両の行動類型別に示す。車両右折時は死亡重傷者数が最も多い行動類型となっており、令和元年以降減少しているものの、平成30年までは増加傾向にある。また、車両右折時が占める割合は年々増加していることも分かる。

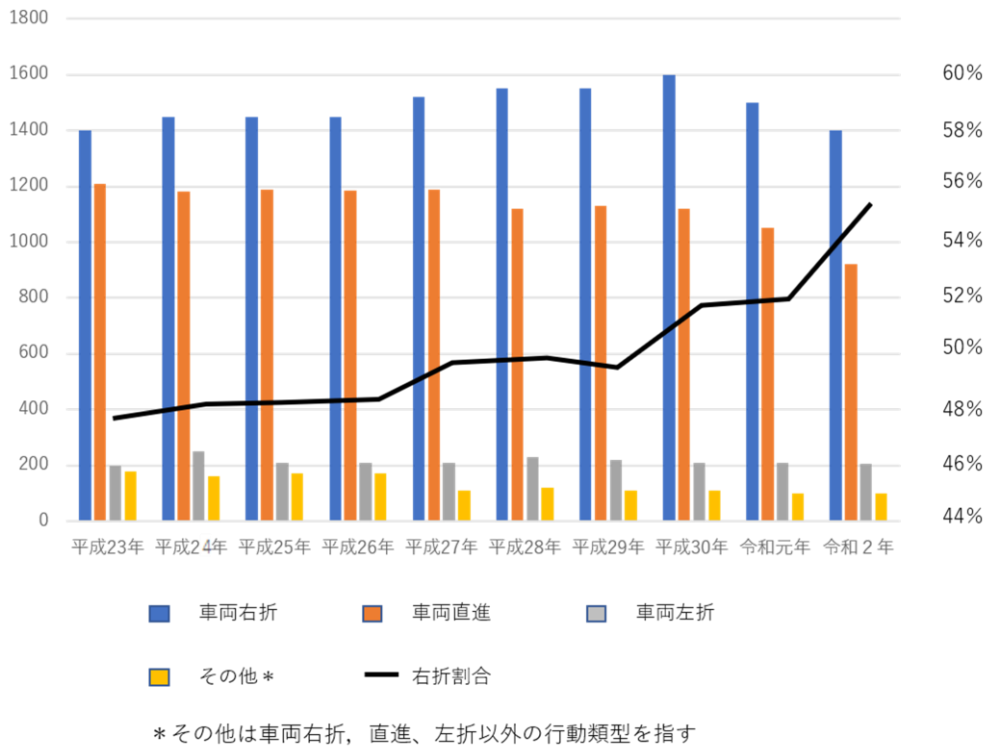


図3 横断歩道横断中における横断歩行者の車両行動別死亡重傷者数の推移

### ■ 安全運転に生かす

今回の事例では対向車Cが先行して交差点を左折したことで、Aさんが交差点付近に歩行者がいないと思いつき安全確認を怠ったため、Bさんを認知できなかったことが主な原因である。先行する車両の行動から周囲の状況を予測することが可能な場合もあるが、交通状況は常に変わっていくことから自身の目で確認することが必要である。今回の事例では「対向車が左折していったから横断する歩行者はいないはず」と考えてしまい、横断歩道の安全確認を怠ってしまったところへ、通常の歩行者よりも移動速度が速いジョギング中のBさんが現れ、衝突してしまった。

Aさんは「交通状況は常に変わっていくもの」と考え、横断歩道の歩行者の有無を確認していれば、横断歩道を通過する前にBさんを発見でき、事故の回避又は被害を軽減する行動をとれたと考えられる。

Bさんは横断歩行者用の信号が青だったため横断を開始したが、少なくとも横断前、横断中に周囲の状況を確認すべきであった。周囲を確認した際に、右折車両が接近することが分かっていたら立ち止まる、ジョギングのスピードを上げるなどの行動で事故を回避する行動をとれたと考えられる。

最後に、交差点は様々な交通が行き交うため、事故が多発しやすい場所となっている。運転する者は交差点を右折する際、必ず横断歩道を含めた周囲の安全確認を確実にすること。安全確認ができなかった場合は停止又は徐行し、交差点を通過するまで安全であることを確認した上で右折を行うようにしよう。横断歩行者は青信号でも左右を確認することが大切である。今回の事例のように、車両の運転手が横断歩行者に気付いていない可能性がある。自分自身を守れるよう安全確認をするようにしよう。

以上